

それは直線にすぎず、物語の空間はうまらなかった。

—— クリスタ・ヴォルフの長編小説『幼年期の図柄』における「主観的真正さ」と〈平凡さ〉の詩学 ——

徳 永 け い

『幼年期の図柄』(Kindheitsmuster, 1976)は、東独を代表する女性作家ヴォルフが自らの戦争体験をもとに書いた自伝的小説である。70年代は東西ドイツともに自伝的作品が流行をした時代であり、身近な現実に傾注した「新主観主義」の発露と取れなくもない。しかし、それにしても、今日のみから見ても、複雑な物語構造をとっていて、語り手の立ち位置を定めるのも、錯綜した物語の筋を解きほぐすのも容易くはない。この作品は大きく分けて三つの筋からなる。作家と等身大の大人の語り手が本作らしき作品を書いていく現在と、第二次世界大戦前から終戦直後にかけての少女時代の思い出が入れ替わり語られる。これに、つい最近語り手が今はポーランド領となったかつての故郷を再訪した旅の報告が挿入される。さらに読者を戸惑わせるのは、同じ人物を指しているにもかかわらず、物語の舞台の時期に合わせて人称が区別されていることである。幼年期を語る時には「彼女」あるいは作家の本名とは別の架空の名前「ネリー」と三人称で、旅行中や現在の出来事について語る時には「おまえ」と二人称で呼びかける。本稿の目的は、こうした人称の分裂や筋の錯綜に着目し、さらに『幼年期の図柄』という表題の意味を問うことでヴォルフの詩学的立場を解明し、本作品のアクチュアリティを引き出すことにあ

る。

定訳『幼年期の構図』を取らずに、『幼年期の図柄』と訳したのは理由がある。英訳版の表題が揺らいだ事実が示すように、ドイツ語の „Muster“ は多義的で解釈が難しい。作中で語り手が表題について述べている箇所を根拠にこの作品に断片性・未完結性の要素をみる研究者 (Koskinas, 2007) もいるが、幼年時代、ポーランド旅行、執筆中の現在という三つのエピソードは無造作に配置されているわけではない。語り手が、無意識的な記憶の連鎖によって分散していきがちな物語をしっかりと舵取りしていることや、記憶の風景の気ままな「コラージュ」を作ることに強く反発している点を踏まえれば、バラバラのエピソードをしっかりと〈接続〉していこうとする語り手の意図が存在している。ではどのように〈接続〉を行なっているのか。ヴォルフ自身によれば、言語という「直線的」で「細すぎる」素材によって、物語という「(立体)空間を埋めていく」ことが彼女の課題であった。一筋縄ではいかぬ複雑な体験の構造に物語の構造が一致することが理想であり、立体的な体験の構造は無数の糸で編まれているものだという彼女の発言に着目するならば、たとえ「直線的」で「細い」言語であっても、それを素材として編み込むことで、「幼年期の図柄」を浮き上がらせることはできるはずだろう。この意味で、絵画や写真の領域から取られた「構図」よりも、テキスタイルと近い「図柄」のイメージこそがふさわしいと考えた。

先行研究においてこの作品は、ヴォルフ自身が用いた詩学的タームである「主観的真正さ (Subjektive Authentizität)」と結びつけて度々論じられてきた。ただしこの概念について共通理解ができていないわけではない。ヴォルフ自身の言葉に立ち戻って再定義を試みるなら、この「主観的真正さ」とは、伝統的な主客の対立を越えて、「私」によってなされた実際の経験をいわゆる客観的リアリティに突きつけ、

書くことによって別のリアリティを生み出そうと試みる詩学的態度であるとまとめることができるだろう。エッセイ『読むことと書くこと』によれば、「別のリアリティ」とは、自然科学や歴史学の分野で求められる「検証可能性」を必要とする客観的リアリティとは異なることが分かる。その代わりに作家自身が「社会的に生きる人間の本性を探求する途中」で発見したものを〈真実〉として内包するリアリティが散文世界には宿るといふ。「社会的に生きる」というのは、関係性の網の目の中で生きるという意味であり、他者あるいは人間を取り巻く環境といった関係を結ぶ相手によって、そこで発見される〈真実〉も変化を被る。ここで定冠詞ではなく不定冠詞がついた「真実 (eine Wahrheit)」が使われているように、この社会的な文脈では普遍的な〈真実〉などないのだ。真実にしろ、リアリティにしろ、抽象化され一般化された形で概念規定された途端に、微妙な差異が捨象されることになる。このような暴力的な一般化を推進する力に対抗しようとする意志が、「主観的真正さ」には感じられる。「私たち」ではなく、「私」という〈個人〉を大切にす詩学は、事実世界＝私たちの生きる現実の社会で、一つの暫定的な真実に過ぎないものが、ともすればまるで唯一絶対の真理であるかのように誤認させる大きな力に抗って、別の真実を提示する可能性を孕んでいる。

従って『幼年期の図柄』で大切にされているのは、現在の「おまえ」自身の、まさに〈個人〉の「経験」である。書くことによって経験をその複雑な構造のままに消化することがエッセイと散文を書く理由であると語るヴォルフが、『幼年期の図柄』を書くことによって消化すべき経験とは、ファシズムの過去である。「ファシズムの『秩序』は、すべて個人の解消とともに終わった」と考える彼女にとって、「差異化を表現するため」にあり、「人間の主体化を支える」散文は理想の形式だった。内容の面では極めて個人的な経験を重視することによって、さらに形式の面では散文を用いることによって、ファシズムの過去を清算しようと努めているのである。

なぜこの小説は「おまえ」という二人称の語りの形式を用いているのだろうか。「おまえ」は幼年期を書くための手がかりとして、私的な史料（写真や家庭内のジャーゴンなど）を利用する一方で、当時の新聞記事をそのまま挿入し、自分の経験と客観的リアリティの仲介をはかる。また、子ども時代の回想が後づけで美化されたものではなく、本当に自分が経験した真正なものかにもこだわり、経験を無意識に記憶が操作していないかどうか疑い続ける。つまり「おまえ」の詩学も、当時の「私」が体感していたことを「主観的真正に」書こうとしている点で、ヴォルフの詩学を実践していると言える。ただし、この小説では、語り手が二人称と一人称と別人格に分裂することで、この詩学がより徹底されているといえる。もし第三者の証人がいなければ、誰かの記憶に基づく証言が真正かどうかは歴史的事実としては確かめようがない。記憶違いの可能性を排除できないからだ。それでは、語ることは許されないのか。本書の語り手は、そういう場合にも、自分を人称で分割することによって、もう一人の自分を「証人」として立て、記憶の場面を自分が確かに経験したものであると証明しようとする。作品の表題に使われている „Muster“ の語源であるラテン語の動詞の *monstro* には、(罪を) 告発するという意味がある。人称を分裂させることで、法廷で自分自身を起訴すること、それが二人称の語りの意味である。そうすることで初めて、語らずに隠していたい、捏造してしまいたい第三帝国時代の思い出を「主観的真正に」書き記すことが可能となったのである。

だが本書の魅力は、いわばこの真正な真実語りという柄の裏面に遊戯性を兼備している点にあることも忘れてはならない。幼年期の自分＝ネリーの描写には感情表現が乏しく、ネリーが魂のない「マリオネット」と呼称されたり、回想がト書き調に記述されている場面が見受けられる点から、読者はネリー

によって演じられた「幼年期」という〈お芝居〉を見ているような印象を受ける。また、経験の「真正さ」を強調するあまりかえって読者に作り話ではないかとの疑いをを持たせるレトリックを多用することで、テキストは図らずもフィクション性を暴露する結果になっている。こうした——「真正さ」を追求しすぎた果てに、フィクションとして読めてしまう——仕掛けをいわば図柄の裏面に仕込み、かつ作品がフィクションであることを公言する序文をつけるヴォルフは、自らの「主観的真正性」の美学の構想に対しても、徹底的に〈反省する〉立場に立っている。

『幼年期の図柄』の詩学を考える場合に、ヴォルフにとって日記の持つ特別な意味も考慮に入れる必要がある。エッセイ『日記——労働手段と記憶』（1964）の中でナチズムの〈英雄崇拜〉思想から〈平凡さ〉を悪とする姿勢を取り出し、それに対抗する砦として名もなき者の日記を挙げているからだ。彼女にとって日記は文芸の原初の形式だった。『幼年期の図柄』と日記の親近性が指摘されているように（Felsner, 2009）、執筆の過程そのものをも扱うこの作品は、日記と長編小説の間に位置するものと言えるかもしれない。さらに『幼年期の図柄』の主人公ネリーが「脇役」的立場に留まっている点にも注意が必要で、これによって一人の英雄の物語としての伝統的な小説と一線を画している。とはいえ、単なる群衆の複数形の物語でもない。ただ平凡であることを強調するだけなら、ファシズムの価値観に捕われたままの全体として無個性の民衆しか描けなかったことだろう。本作はあくまでも、〈平凡〉ではあるがしっかりとしたパーソナリティーを宿した人物に光を当てる物語であり、それは同時に正史の影に秘匿された一般市民それぞれの罪を暴くことに成功している。

ヴォルフが本書で達成したのは、「主観的真正さ」に反省の要素を加えた独自の詩学によって、複数の「私たち」にまとめられる〈平凡な〉市民の範例であると同時に〈私的な〉物語を、日記的な書き方とフィクションを、過去と現在を、真面目と遊戯性を両立させるような立体的な編み物としてのテキストを、直線的な言語で編み出すことだったのである。